

歴史よもやま話 その10

茶の湯御政道 つづき

織田信長、豊臣秀吉が歴史から退場したあと、政権を篡奪した徳川家康が「茶の湯御政道」を積極的に利用したという記録はないが、二代秀忠、三代家光が茶の湯に参加した記録は幾つか残されている。秀忠は古田織部が、家光は小堀遠州が指導したらしい。

織部は秀吉時代からの武将であり、後世「利休七哲」に数えられた千利休の直弟子、利休とは複数書簡の遣り取りが残されているが、「織部焼」でも有名である。織部の茶の湯は、利休の茶道を踏襲しながらも動きのある作法で、茶室や茶碗には彼独自の工夫がみられ、神屋宗湛をして、その茶会記「宗湛日記」のなかで、織部の使用する茶碗を「へうげもの（ひようげている）」と評し驚かせている。

千利休が秀吉の怒りを買って堺に蟄居を命じられたとき、誰もが知らぬ顔をするなか、細川忠興と織部の二人だけが淀の船着場に見送ったといわれている。

大坂の陣で、豊臣方への内通が疑われ切腹を命じられた。織部はそれに従って果てたという。

小堀遠州は織部の直弟子、茶会記「今井宗久茶湯書抜」に、当時、作介といわれた遠州が織部直々に指導を受ける様子が記録されている。遠州は徳川幕府の官僚大名、備中松山城を築城し一帯を治めた。また、今日まで続く茶道「遠州流」の始祖でもある。遠州の茶道は「きれい寂び」といわれその所作が洗練され垢抜けたものであったという。

また作庭家としても幾つかの名庭園を残しており、京都・二条城二の丸庭園、南禅寺塔頭・金地院の枯山水、備中高梁の頼久寺庭園などが有名である。

最近の調査で、秀忠が織部家を訪れ、武家流の茶法を定めるよう命じたとする記録が見つかったという。これによる茶の湯が**武家茶道**といわれる。

また徳川将軍が大名の屋敷に出向き、そこで茶会が催され、**数寄屋御成**といわれた。

将軍の他、松平忠長、徳川頼房、義直ら徳川連枝を相伴させた。大名達は不調法なく、滞りなく茶会を開催するため、古田織部、小堀遠州、片桐石州など武家茶道の専門家に指導を受けた。

大名（武家）茶道といわれ、松平不昧、井伊直弼などが受け継ぎ、千家の茶道（裏・表・武者小路の**町衆茶道**）とは別の流れとなった。

「安政の大獄」を主導し、最後は「桜田門外の変」で暗殺された大老井伊直弼が、茶道に勤しみ「茶の湯一会集」という茶道の専門書を書いていたことは興味深い。「一期一会」という画賛や短冊などに書かれる標語は、元々は千利休の言で、「山上宗二記」に記載されていたが、この直弼の書に書かれたことによって今日、普遍的に使われるようになったと言われる。

今日まで続いている武家茶道の茶会があり、「柳営茶会」という。徳川家連枝、譜代大名や旗本などの子孫が組織する「柳営会」があり、「徳川記念財団」が東京音羽にある護国寺茶寮などで毎年開催する茶会である。護国寺は五代将軍・綱吉の生母・桂昌院の菩提寺でもある。